主体的に学習に取り組む態度の育成

～ 一人ひとりが学びを追究する「自由研究」の実践から ～

小山小学校　**瀬間　祐紀**

Ⅰ　はじめに

１　児童の実態

「他律から自律へ」は、本学年（６年生）の児童が、昨年度（５年生）の終わりから学年のめあての一つとして掲げている言葉である。この言葉が本研究のテーマでもある「主体的に学習に取り組む態度」に目を向けたきっかけであった。

本学級は男子１２人、女子１８人、計３０人（うち支援級１人）の児童で構成されている。素直で、教師や他からの問いかけ、与えられた課題に対しては意欲的に考え、学ぼうとする。一方で、「他律から自律へ」の言葉に表されるように、物事に対して自ら働きかけ、課題を見出し、主体的に行動しようとする児童は少ない。つまり、「言われたことはきちんとできる」が「言われないとなかなか行動に移すことができない」児童が多いという実態があった。

次の文章は４月の初めに児童が「１年後のめざす姿」というテーマで書いた日記である。

> 「１年後のめざす姿」
>
> １年後のめざす姿は、６年生の目標である「自律している姿」です。理由は、５年生の頃に「他律から自律へ」を目標にしていましたが、結局他の人に任せ、自分で行動にしていなかったからです。
>
> 最高学年として、大黒柱として、自分で考えて行動にうつして自律していきたいです。この１年間で自律できるようになりたいので、みんなで支え合って、自律できるようにがんばりたいです。

この文章から子ども自身も「〇〇したいと考えてはいるが、他の人に任せてしまったり、行動に移せていなかったりする」ということを自覚しているとともに、自らの課題としていることが分かる。他の児童にも聞き取り調査をしてみたところ、多くの児童が同じ課題を持っていることが分かった。

児童が書いた「１年後のめざす姿」は、生活面のことであるが、学習面とも大きく関わっていると言える。なぜなら、生活面で課題があれば、生活の一部である学習面でも同じ課題があると考えられるからだ。実際に、先に記した課題を持つ多くの児童は、学習面において主体的に取り組んでいるとは言い難く、自ら課題を見つけ、学ぼうとする様子はあまり見受けられなかった。

２　「学びに向かう力（主体的に学習に取り組む態度）」の必要性

子どもたちがこれから生きていく社会は、新しい知識・情報・技術が社会活動の基盤として重要視される、いわゆる「知識基盤社会」の時代だと言われている。また、一層の情報化やグローバル化によって、社会の変化が進む中で、先を見通し、それらの流れについていくことはこれまで以上に難しくなっていくと考えられる。

そのような時代背景の中で、子どもたちはどのような力を身に付けることが必要なのか。平成２７年８月に行われた論点整理（教育課程企画特別部会）によると、学校教育法第３０条

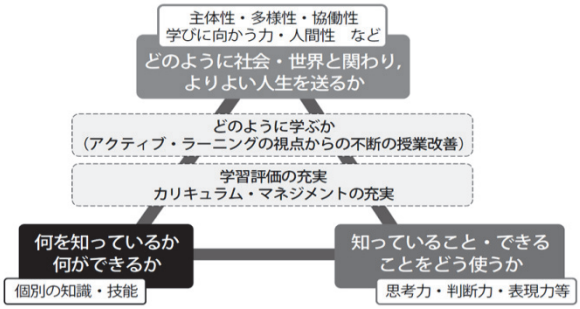
第２項に示される、いわゆる学力の３要素（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」）から、育成すべき資質・能力を次のような三つの柱に整理している。

ⅰ）「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）」
ⅱ）「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」
ⅲ）「どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」

さらに、ⅲ）には、次のように続いている。

［ⅲ）は］上記のⅰ）及びⅱ）の資質・能力を、どのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素であり、以下のような情意や態度等に関わるものが含まれる。（下線は筆者により補足挿入）

つまり、ⅲ）「どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」が他の二つの資質・能力を支えるものであるといっている。



「育成すべき資質・能力の三つの柱を踏まえた日本版カリキュラム・デザインのための概念」＊1

さらには、学習活動・指導方法の改善として整理された３点のうちの１つに、

○子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。（下線は筆者による）

と示されている。

このように、これから社会的に求められていく資質・能力において、「学びに向かう力」（主体的に学びに取り組む態度）を見逃すことはできない。これからの社会を生きていく児童にとって、自ら働きかけ、課題を見出して解決していく力（主体的に学習に取り組む態度）を培っていくことは特に必要になっていくと考えられる。

３　研究テーマ

児童が自ら主体的に物事に働きかけ、課題を見つけて解決することは、学習活動においてだけではなく、社会生活全般で大切になってくる。児童が課題を解決する経験を数多く重ねることで、主体的に学習に取り組む態度の育成を図ることができ、一人ひとりが学びを追究する姿を目指せると考え、本研究のテーマを設定した。

Ⅱ　実践内容

１　テーマに迫るための手立て

児童が主体的に学習に取り組む態度を養っていくためには、まず日々の授業改善が必要であると考えた。学校生活の大部分を占める授業において主体的な学びを経験することは、児童の「学びに向かう力」の育成に大きく関わっていくであろう。

しかし、児童にとって授業だけが主体的な学びを経験することができる時間ではない。児童が素朴な疑問をもつのは、むしろ日常生活からが多いのではないだろうか。日常生活における素朴な疑問は、自分の内面から出たものなので自分事として考えやすい。そのような疑問から生まれた課題意識は、主体的に

学ぶ第一歩となるだろう。

本研究では、日常生活で感じた子どもたちの素朴な疑問を課題とし、「学び」に向かわせるための手立てとして「自由研究」を柱として取り上げた。

２　自由研究の意義

奈良女子大学附属小学校は、自律的に学ぶ子どもを育てる「奈良の学習法」の中で、基盤としている活動の一つとして「自由研究」を重視している。奈良女子大学附属小の杉澤氏は自由研究の本質を次のように述べている。『自由研究の本質は、子どもが自分の生活体験、自然体験、社会体験から持った問いを顕在化させて問題を設定し、自ら、Plan（計画）・Do（実行）・Reflection（熟慮・省察）を繰り返しながら、Judgment（判断・見識）を重ね、新しいものやことを生み出す創造的な活動にあると考える。』＊2

このような自由研究に児童を導くことができれば、前述した「主体的に学習に取り組む態度」を育成することができるのではないかと考えた。自由研究は児童がそれぞれの日常生活の「知りたい・調べたい」という疑問から始まっている。自分自身がたてた課題（つまり「自分の問い」）が解消されていくことは嬉しいことであり、楽しいことであると考えられる。

学ぶことは本来楽しいことである。その理由は、新たな知を獲得することができたり、自らの考えを広げ、深めることができたりするからである。児童には「学ぶことが楽しい」という経験をたくさんしてもらいたい。その経験は、必ず次の問いにつながり、学ぶ意欲や姿勢を高めるのではないかと考える。「自由研究」はそのきっかけとなる要素をもっているのである。

３　自由研究の進め方

自由研究では児童一人ひとりの疑問（知りたい・学びたい）から課題を設定することから始まる。そして、「情報を集める」「内容をまとめる」「見合い、良いところを見つける」この三つの手順を繰り返すことで深めていく。（図１参照）

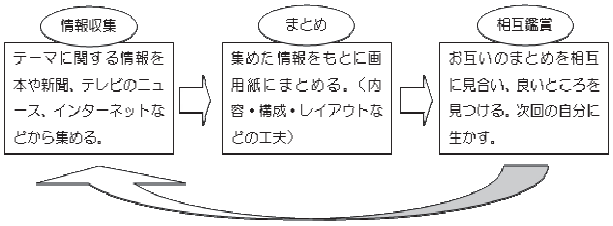
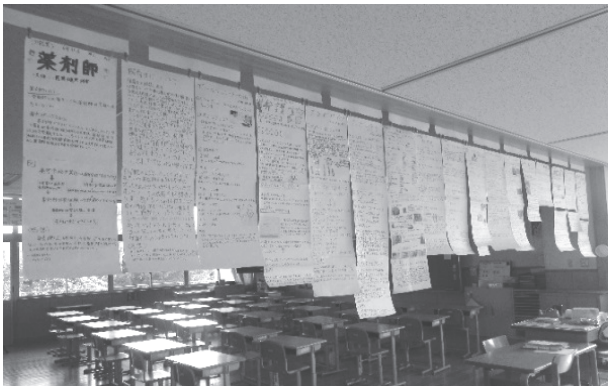


図１　自由研究の進め方イメージ図

子どもたちは普段から与えられた課題（教科書、ドリルなど）に取り組むことに慣れてしまっている。子どもたちにとって生活する上での多くのことが他の人が決めた課題であり、自ら課題を決めている様子はなかなか見られなかった。

そのような児童の実態を考えると、最初のうちはある程度の方向性を示すことが必要であると感じた。そこで、ゆくゆくは課題を「自由」とし、自分自身で課題を設定、追究していくことを目標とした。まずは、何を調べたらよいのかが分からないという状況に陥らないように教師がテーマを設定し、児童がテーマに沿った課題を自由に考え、追究していく方法をとった。

約１ヶ月の期間を設け、情報収集（図書資料、ニュース、インターネットなど）をし、それらを四つ切の画用紙にまとめた。まとめた画用紙は教室の壁面にぶら下げ、お互いのまとめを見合える形をとった。情報収集については、宿題としている自主学習ノートに蓄積していった。そうすることによって、途中経過をこちらが把握できるようにした。



掲示の様子

４　実践の概要（１学期）

第１回　自由研究　「震災・地震」

第１回の内容設定のきっかけは、４月の朝会の学校長の話であった。熊本地震のことに言及し、「熊本で被災された方に対して、自分は何ができるのかを考えて、行動してみてほしい」というものである。

朝会後、子どもたちに「自分たちはどのようなことができるのか」を考えさせた。すると、「手紙を書いて送る」「募金を呼びかける」などの意見が出たが、どの意見もあまり具体的ではなかった。そこで、「自分たちが具体的にできることを調べたり、考えたりしてきてほしい」ということを投げかけた。

次の日、何人もが自分なりに支援の方法を考えたり、調べたりしてきた。その中には、言葉は違うが、次のようなことを記している児童が何人もいた。

> 「震災で困っている人がいることは分かっている。でも、実感はそこまであるわけではない。今の自分は、地震についても、震災についても全然知らない。だから、“知る”ということがまず大切なことだと思う。」

この言葉には、「震災について知りたい」という素直な思いが表れており、課題が持てた姿だと言える。

私は「知りたい」という思いを大切にしたいと考え、学級全体にも広げ、共有することで第１回の内容を「地震・震災」とした。前述した通り、大きな枠組みだけを全体で設定し、そこから何を調べ、まとめていくかはそれぞれに任せた。熊本地震について、「自分たちができること」を考えてまとめたものもあれば、地震の仕組みについてまとめたものもあった。

＜第１回　主な課題＞

- なぜ地震は起きるのか
- 東日本大震災　・地震の歴史
- 熊本地震　私たちができること
- もし地震が起きたら…
- 災害時に役立つ便利アイテム
- 地震雲について
- 阪神大震災とその後
- 地震による被害

第２回　自由研究　「職業」

第２回の内容は総合的な学習の時間との関わりも考慮して「職業」と設定した。６年生の総合的な学習の時間のテーマは「見つめよう自分」である。「人」の生き方や考え方に触れ、自分自身につなげていくことを目的として進めてきている。「人」の生き方・考え方に迫っていく上で、その人がどのような職業につき、どのような思いで仕事をしているのかを知ることはとても有意義なことである。

７月に行った修学旅行でも、修学旅行に関わる人を調べたり、その人たちにインタビューしたりすることで、総合的な学習とのつながりも図りながら、学びを深めていった。修学旅行に関わる人とは、「ガイドさん」「写真屋さん」「ホテルの女将さん」「職人さん」など、様々な職業についている人たちのことである。修学旅行という児童が楽しみにしている行事を通して「自由研究」を進めることで、意欲の高まりも期待できると考えた。

また、児童は普段の生活で様々な職業の人と直接的・間接的に関わりをもって生活している。多くの児童は、ある職業にあこがれを

もち、将来の夢としている。このことから、「職業」は身近で課題設定をしやすいものだと考え、第２回の内容を「職業」とした。なお、自由研究の進め方は第１回と同様に行った。

＜第２回　主な課題＞

・アナウンサー　・サッカー選手
・ゲームクリエイター　・検事
・弁護士　・小学校の先生　・料理人
・保育士　・パティシエ　・救命救急士
・伝統工芸　職人　・AD　・建築家
・通訳案内士　・エンジニア　・薬剤師
・プロ野球選手　・調教師　・獣医

５　具体的な児童の様子

第１回・第２回の取り組みの様子を、自主学習ノートに書いた児童の「その日にやったこと」「感想」をもとに紹介する。学びに対して主体的に取り組んでいる姿が見られた箇所に下線を引いた。なお、下線は全て筆者によるものである。

第１回　「震災・地震」

４月２７日（水）

〈地震〉
地震はどうして起きるのか？ということと、くまもとの地震で私たちができることについて調べました。

感想
〇なかなか震災のことについて、考えられなかったので、今日、調べたりすることができて良かったです。今、くまもとの人たちは、ご飯も少しだったり、お風呂とかも入れなかったりするので、今の自分の生活はみんなができることではないということを考えて、できることなどを探して、協力したいです。

調べたことを自分の生活とつなげて考えている。

５月１日（日）

〈エコノミークラス症候群とは…？〉
くまもとの地震から、ニュースでよくきく、エコノミークラス症候群について調べて、くまもとの地震とどんな関係があるのか？について考えました。

ニュースでよく聞くワードを自由研究のテーマとの関係から考えていくことで、学びを広げ、深めている。

感想
〇今日は、くまもとの地震から起きた、エコノミークラス症候群がどうして起こるのか？ということやそれについて、自分で予想をもてたので、よかったです。
この症状は、地震のときだけではなく、飛行機に乗ったりするときも起こると思うので、予防する方法も覚えておきます。

「疑問（自分の課題）→予想→調べる→自分の生活への応用」というように、「自由研究」としてまとめる過程でも課題解決的な学びが生まれている。

５月３日（火）

〈震災〉
地震が何故、起こるのか？ということをもう１回調べました。
どうしてかというと、調べなおしているときに、「活断層」など分からない言葉が出てきたので、調べたりないと思ったからです。

調べていく過程で「わからない」が出てくることで、「調べよう」「調べたい」という気持ちが表れている様子がうかがえる。

感想
○たりないところを「よりくわしく！」調べることができたのでよかったです。そして、新しい疑問も解決できたのでよかったです。でも、まだよくわからない言葉があったのでそこも調べたいです。

疑問が解消されてよかったという満足感ともう少し調べたいという意欲が垣間見える。

５月４日（水）

〈震災〉
今日は、「浅い地震が何度も…」ときのう調べたことで書いたのですが、くまもとの地震は、震度６～７などの地震もあったので、マグニチュードや、震度に関係があるのかな？と思い調べました。
そして、今回のくまもとの地震はなにが原因で起きたのか？ということもまとめました。

感想
○今日は、疑問に思ったことが解決して、納得できました。最初は、何が浅いのかな？マグニチュードってよく聞くけど、なんなんだろう？など、ずっとわからなかったので、分かったのでよかったです。
それと、分かったことが増えたのでうれしいです。まとめのことも考えられたのでよかったです。

疑問を解決させることによって、分かったことが増え、嬉しいと感じている。学びの有用性を実感している。

第２回　「職業」
６月５日（日）

〈『職』～お父さんとお母さんの仕事～〉
今日は、お父さんのやっている仕事とお母さんのやっていた仕事のインタビューをしました。

感想
○お父さんとお母さんにインタビューをして、知らないことを知ることができました。
考えてみると、お父さんの仕事やお母さんがしていた仕事など知らなかったので、分かったことが増えて、よかったです。

課題を解決するために、インタビューという手法をとっている。新たな手法により、学び方にも広がりが見られた。

６月２１日（火）

〈『職』情報番組のアナウンサーの仕事とは？〉
どうして、アナウンサーについて調べたのかというと、テレビなどで、原こうも見ずに、スラスラ話しているアナウンサーを見て、どんなことや仕事をしているのかな？と思って調べました。

感想
○今日は、「アナウンサー」の仕事について調べました。
調べたことを丸写しにしないで、自分で文を工夫して書くことができたので、良かったです。
次は、「やりがい」「アナウンサーになってよかったこと」について知りたいです。

調べたことを丸写しするのではなく、自分なりに整理している意識が見られる。

６月２２日（水）

〈『職』アナウンサーの種類とやりがい〉
きのう「どのような仕事か？」「仕事の予定」について調べて、「仕事の種類」や「その人それぞれが感じるやりがい」を調べたら、もっとアナウンサーについて知れると思ったので、調べました。

感想
○今日は、種類とやりがいを調べました。やりがいでは、その人のことをより詳しく知れたのでよかったです。アナウンサーは「伝える」ことが大事だということをやりがいから、分かることができたのでよかったです。

調べたことを整理・分析していく過程で、自分なりにポイントを押さえている。

Ⅲ　児童の変容

○量的な変容

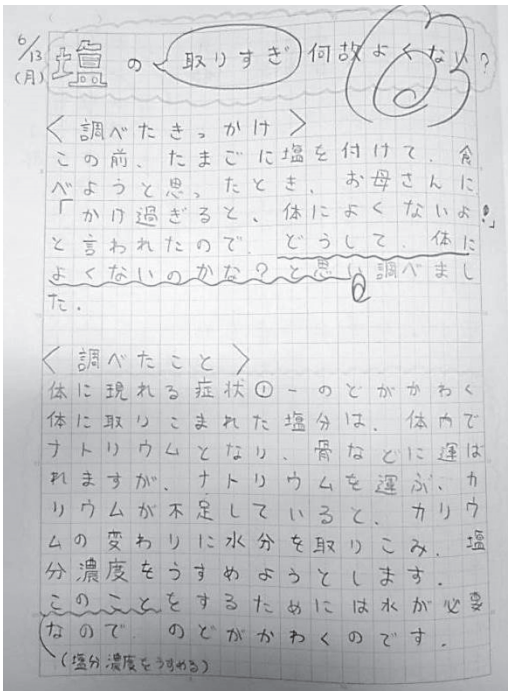
まとめには、四つ切の画用紙を使用している。まとめたい内容が１枚で入りきらなければ、２枚、３枚とつなげていった。つまり、枚数が増えることは、まとめたい内容がたくさんあるということである。

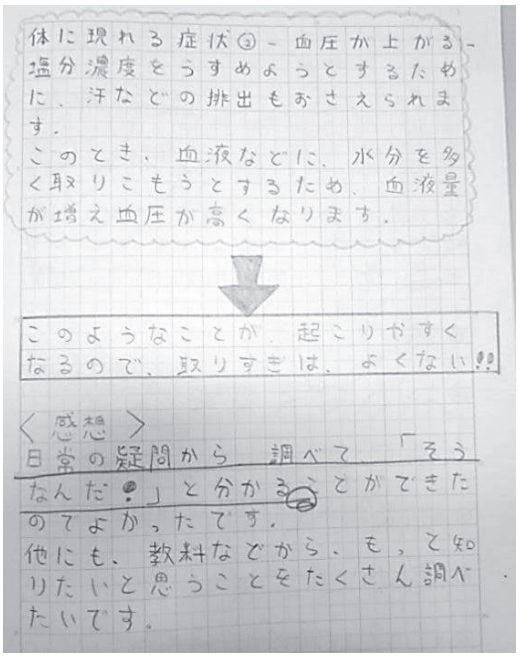
枚数が多いことが良いとは限らない。また、テーマによっても変わってくることである。しかしながら、その児童がどれだけ興味をもって調べたかやもっと書きたい・伝えたいという思いをうかがい知ることができるだろう。

第１回「地震」	→	第２回「職」
平均　約 1.7 枚		平均　約 2.3 枚

○自分で課題を設定して追究する姿

本学級では家庭学習の課題として自主学習に取り組んでいる。１日６０分以上ということを約束とし、児童がメニューを決めている。授業の振り返りや漢字練習・計算ドリルなど、こちらから課題を提示することもあるが、それ以外は基本的に自由である。その自主学習で次のような取り組みが見られた。


6/13（月）
塩の取りすぎ何故よくない？
〈調べたきっかけ〉
この前、たまごに塩を付けて、食べようと思ったとき、お母さんに「かけ過ぎると、体によくないよ！」と言われたので、どうして、体によくないのかな？と思い調べました。
〈調べたこと〉
体に現れる症状①－のどがかわく
体に取りこまれた塩分は、体内でナトリウムとなり、骨などに運ばれますが、ナトリウムを運ぶ、カリウムが不足していると、カリウムの変わりに水分を取りこみ、塩分濃度をうすめようとします。このことをするためには水が必要なので、のどがかわくのです。
（塩分濃度をうすめる）


体に現れる症状②－血圧が上がる－
塩分濃度をうすめようとするために、汗などの排出もおさえられます。
このとき、血液などに、水分を多く取りこもうとするため、血液量が増え血圧が高くなります。
このようなことが、起こりやすくなるので、取りすぎは、よくない!!
〈感想〉
日常の疑問から、調べて「そうなんだ！」と分かることができたのでよかったです。
他にも、教科などから、もっと知りたいと思うことをたくさん調べたいです。

お母さんとの会話から「なぜ塩を取り過ぎると良くないのだろう？」という疑問が生まれ、自分なりに調べて、結論付けている。与えられた課題ではなく、日常の疑問からスタートしたまさに主体的に学習に取り組んでいる姿といえるであろう。

Ⅳ　研究の成果と課題

児童の自主学習ノートへの記述（自由研究に関わるものと日常の疑問からの追究）や完成したまとめなどから「自由研究」が子どもの「主体的に学習に取り組む態度」とどのようにつながっていくかを論じてきた。

自由研究への取り組みをきっかけとして、児童は､疑問を自分なりの方法で解決したり、新たな疑問をもったりすることができた。また、自由研究に取り組む過程のなかで、学んでいることと生活とのつながりを見出したり、情報収集の方法も獲得したりしている。さらに、「次の自由研究のテーマは自由がいいです。」「やりたいテーマがあります。」という声も児童から聞かれ、自由研究を楽しみにしている姿も見られた。

このように、自分の問いをもち追究していくことが､「主体的に学習に取り組む態度」にもつながり、それを繰り返すことによって、課題解決的な学習の経験も蓄積することができるであろう。

一方で、本研究では、主に一人の児童の自由研究に対する過程を追ってきた｡そのため、事実を一般化し、有用性を語るには客観的な事実が乏しい。また、児童から聞かれた「楽しみにしている」という声も、全ての児童からではない｡「自由研究」という取り組み自体には有用性があっても、児童にその実感がなければ効果は薄まってしまう。より多くの児童に「自由研究」の有用性や楽しさに気付かせていくかが課題である。

また、自由研究という個人での取り組みをさらに広げていくための手立てが必要になってくる。自由研究で取り組んでいる内容と他の教科・領域とをつなげて考えたり、自分の自由研究をクラスの友だちに発表するなど、違う形で発信したりすることによって、お互いに学びを広げられるだろう。個人での学びとお互いの学びを行き来することによって、学びが広がったり、深まったりしていく。そのために、教師がどのように介入し、関わっていけるかが大切である。

今後も自分から物事に働きかけ、課題を見つけて解決する､「主体的に学習に取り組む子どもたち」を育てていきたい。

引用文献

*1『教育課程企画特別部会　論点整理　補足資料』，27 頁
*2 奈良女子大学附属小学校学習研究会著；『自律的に学ぶ子どもを育てる「奈良の学習法」「話す力，書く力，つなぐ力」を育てる』，明治図書，２０１５年，66 頁

参考文献

①奈良女子大学附属小学校学習研究会著;『自律的に学ぶ子どもを育てる「奈良の学習法」「話す力，書く力，つなぐ力」を育てる』，明治図書，２０１５年
②「教育課程企画特別部会　論点整理」